

メッセージアウトライン マタイの福音書8：28～34 「悪霊を追い出すイエス」

[28]「さて、イエスが向こう岸のガダラ人の地にお着きになると、悪霊につかれた人が二人、墓場から出て来てイエスを迎えた。彼らはひどく狂暴で、だれもその道を通れないほどであった」

このガダラ人の地とはイエスの一行が舟に乗って出発されたカペナウムの地の湖をはさんで反対側、ガリラヤ湖の東南にあった。この地にはユダヤ人だけではなく異邦人もたくさん住んでいた。そして彼らはまたユダヤ人には汚れた動物として禁じられていた豚を飼っていたのである。また彼ら異邦人と一緒に住んでいるユダヤ人たちも聖書で教えられている戒めを破り、豚を飼うようになっていた。そのようにおよそ聖書的ではない、全く霊的暗黒の宗教的無知と迷信の地に、イエスの一行が着いたのである。するとなんと、悪霊につかれた人が二人、墓場から出て来てイエスを迎えたのであった。王の王、主の主、世の救い主、贖い主としてこの世に来られたお方を迎えたのは町の権力者や貴族、町長、村長、議員たちなどではなく、悪霊つきの男たちだったのである。

この悪霊につかれた男たちはまず第一に墓場に住んでいた。普通の人間ならばだれも墓場に住みたいとは思わないだろう。これで彼らが異常な反社会的な生活をしていたことが分かる。第二に彼らはひどく凶暴で、だれもその道を通れないほどであった。並行箇所マルコ5:3~4には「この人は墓場に住み着いていて、もはやだれも、鎖を使ってでも、彼を縛っておくことができなかった。彼はたびたび足かせと鎖でつながれたが、鎖を引きちぎり、足かせも砕いてしまい、だれにも彼を押さえることはできなかった」と書かれている。(マルコの福音書の方では二人のうちの一人に焦点を当てて書かれている)

ここから分かることは、彼らは超人的な力を発揮する暴力的な人間であったということである。さらに第三の点はマルコ5:5によれば、「夜も昼も墓場や山で叫び続け、石で自分のからだを傷つけていた」とある。これは正気を失った狂人の姿である。

以上のようなことから考えると、現代の医学から言えば重症の精神病患者であると結論づけるかもしれない。しかし、ここにはとてもそれだけでは終わりがきれないものが含まれている。

[29]「すると見よ、彼らが叫んだ。『神の子よ、私たちと何の関係があるのですか。まだその時ではないのに、もう私たちを苦しめに來たのですか。』」

この二人の男はイエスとは初対面であった。それなのにどうしてイエスが神の子であるとの知識を得たのであろうか。このことはまだ弟子たちも十分には理解していないことであった。→27節

これは明らかに人間精神以上の靈的力が彼らに作用していたことを裏付けるものである。この福音書の記者マタイは4:24でも8:16でも、また10:1や10:8でも「病氣」と「悪霊つき」を区別しており、病氣は「癒す」、悪霊は「追い出す」と区別して記している。それゆえ、悪霊つきは病氣ではなく、実際に悪霊が人に働いていたのだということが分かる。

この悪霊とは、サタン（悪魔）がかつては力ある天使であったが、神のようになろうとして墮落して神にさばかれサタンとなった(エゼキエル28:12~16)

のと同様、墮落してサタンに従うようになった天使（御使い）のことである。→Ⅱペテロ2:4、ユダ6、黙示12:9

この墮落した天使たちが悪霊となって、人間に影響を与え、人間に与えられる神の救いを妨げようとしているのである。

「その時」とは世の終わりの神のさばきの時。→黙示20:10 悪霊は神の最終的な神のさばきがあることを知っていた。

私たちはクリスチャンとしてこのような悪霊どもが存在し、それらが折りあらば人に悪い影響を与えようとしていることを忘れてはならない。

[30-32]「そこから離れたところに、多くの豚の群れが飼われていた。悪霊どもはイエスに懇願して、『私たちを追い出そうとされるのでしたら、豚の群れの中に送ってください』と言った。イエスは彼らに『行け』と言われた。それで、悪霊どもは出て行って豚に入った。すると見よ。その群れ全体が崖を下って湖になだれ込み、水におぼれて死んだ」

並行箇所のマルコ5:6~13と比較するともう少し詳しくその時の状況が分かる。→

「彼は遠くからイエスを見つけ、走って来て拝した。そして大声で叫んで言った。『いと高き神の子イエスよ、私とあなたに何の関係があるのですか。神によってお願いします。私を苦しめないでください。』イエスが、『汚れた霊よ、この人から出て行け』と言われたからである。イエスが『おまえの名は何か』とお尋ねになると、彼は『私の名はレギオンです。私たちは大勢ですから』と言った。そして、自分たちをこの地方から追い出さないでください、と懇願した。ところで、その山腹では、おびただしい豚の群れが飼われていた。彼らはイエスに懇願して言った。『私たちが豚に入れるように、

豚の中に送ってください。』イエスはそれを許された。そこで、汚れた霊どもは出て行って豚に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れが崖を下って湖へなだれ込み、その湖でおぼれて死んだ。」

「レギオン」とは六千人から成るローマの軍団の単位である。これは多くの悪霊が一人の人間に入ることができるということを示している。→マタイ12:45、ルカ8:2

豚の数は二千匹ほどであったが、それらすべてに悪霊が入って行動をコントロールして湖に飛び込ませ、溺死させたのである。

ここを読んでわかることはイエスというお方は大変な権威を持っておられるということである。彼は誰にもできなかったこと、悪霊を追い出すということをした。これは怪しげなまやかしではなく、正真正銘の事実であった。

第一にイエスは「行け」というただひとことの権威ある言葉で悪霊を追い出された。呪文や魔術や特別な道具などは一切ない。第二にたくさんの豚が一斉に駆け出し、飼う者がついていたのに、ガリラヤ湖になだれ込み、水におぼれて死んでいる。トリックや偶然の一致ということは考えられない。第三にこの悪霊をガダラ地方のだれも呪文や魔術によって追い出すことができなかった。明らかにイエスの悪霊追い出しのわざは迷信の多い当時であっても異質のものであった。

これらのことからイエスは正真正銘、神の権威で悪霊を追い出されたのだということが分かる。

そしてこの悪霊どもは今もなおその働きを続けていることを覚えておかなければならない。Ⅰコリント10:19~20では偶像への献げ物は、実は悪霊への献げ物になっているのだと教えている。またⅠヨハネ4:1~6においては、反キリストの霊が今すでに世に來ていると書かれている。

悪霊は、真の神から人を引き離し、不従順にし、混乱と錯乱をこの世にもたらし、偶像を拝ませ、キリスト教の異端や間違った教えを信じさせ、永遠の滅びに至る広い道を歩ませる働きを今も進めているのである。

[33-34]「飼っていた人たちは逃げ出して町に行き、悪霊につかれていた人たちのことなどを残らず知らせた。すると見よ、町中の人々がイエスに会いに出て来た。そして、イエスを見ると、その地方から立ち去ってほしいと懇願した」

豚を飼っていた人々は町に逃げ行って、イエスが悪霊につかれた二人の男から悪霊どもを追い出し、彼らから出た悪霊どもが豚に入り、その結果、湖に飛び込んでおぼれ、溺死したことなどの一切を町の人々に伝えた。その結果はどうなったか。すると町中の人々がイエスに会いに出て来た。そして、

その地方から立ち去ってほしいと懇願したのである。

本来ならば長年悪霊につかれていた狂暴な男たちから悪霊を追い出して、彼らを普通の市民生活ができるように正常にしてあげたわけだから感謝されるはずである。しかし、町の人々の反応は全く逆であった。彼らはイエスにこの地方から立ち去ってくれと願うのであった。なるほど豚二千匹の損失は経済的に大損害であったであろう。しかし、悪霊につかれていた男たちが正常になり、市民生活に復帰できるようになったことはどのように評価するのか。豚と人間を天秤にかけて彼らは豚を取り、ことばは丁寧であるが、悪霊ならぬイエスの方をこの地方から追い出そうとするのである。彼らはなんと目先の利益のことしか考えなかったことだろう。これはガダラ人の地の人たちだけではない。ここにすべての人間の持つ罪の性質の原点を見るのである。

さて悪霊を追い出された人はどうなったか。これに関してはルカ8:38-39を見たい。→

「悪霊が去ったその人は、お供をしたいとしきりに願った。しかし、イエスはこう言って彼を帰された。『あなたの家に帰って、神があなたにしてくださったことをすべて、話して聞かせなさい。』それで彼は立ち去って、イエスが自分にしてくださったことをすべて、町中に言い広めた」

この悪霊につかれていた人のように、自分の魂の不自由さを知り、そこから解放された喜びを味わった者は真の神への感謝を抱くことができる。そして心身ともに自由にされた自分自身を証人として力強く家族、親族にも、他の人々にもイエス・キリストの救いを宣べ伝えることができるのである。

私たちもガダラ人の地の人々のように目先の利益を追ってイエスを追い出す者になるのではなく、レギオン軍団ほどの悪霊から解放された者のように、多くの迷信や八百万の神々のはびこるこの日本において、わが身を救い主イエス・キリストの証人として

その福音と救いを宣べ伝え証していく者になりたい。そして一刻も早く、日本が悪霊の働きから解放されて、多くの人々が真の神、救い主を信じ、この地上に神の国が現わされてくるように祈りつつ、信仰の歩みを続けていくことが大切である。